英語教育のための電子環境
― 全学教育英語授業におけるコンピュータネットワーク利用の効果 ―

野崎 剛一（総合情報処理センター）
E-mail: nozaki@net.nagasaki-u.ac.jp
鈴木 千鶴子（全学教育非常勤講師）
E-mail: suzuki@n-junshin.ac.jp

1. はじめに

ミレニアム、西暦2000年を迎え、年頭に提言された首相の私的懇談会「21世紀日本の構想」による”英語の第二公用語化”（正確にはその可能性）論が話題を呼んでいる。その是非を問うことはさておき、その懇談会報告書を受けて小渕恵三首相が施政方針演説で示した「教育立国」の目標として「21世紀を担う人々はすべて、・・・国際共通語である英語で意思疎通ができ、インターネットを通じて国際社会の中に自在に入っていけるようにすることだ」[1]との訴えに異論を唱えることは難しい。少なくとも日本の高等教育を担う大学人にとって「教育立国」を目指すと言う政府の考えは心強くもあり、正に21世紀を担う人々を教育している側としてむしろ責任を再認識させられる。筆者らはこの「英語」と「インターネット」の統合的教育について、1995年度? 1997年度の間文部省科学研究費補助金（国際学術研究）[2]により実践研究を行い、その結果を『センターレポート第17号』で報告した。[3]本稿では、それ以降の研究成果と教育実践（1998年度、1999年度）について報告し、特に標題のテーマに対して「英語教育」と「情報教育」の観点から具体的提案を試みる。

2. 教育実践の方法

1998年度、1999年度ともに以下の1999年度の例で紹介する方法で実施した。

2.1. 対象クラス

全学教育の外国語科目「総合英語Ⅲ」（前期）「総合英語Ⅳ」（後期）を原則として連続し通年で受講の工学部2年生、1クラス約60名。全学生とも教育用のユーザー個別IDアカウントの発行を受けて受講。

2.2. 授業形態・内容

授業では、例えば地球温暖化、環境ホルモン、クローン生物、遺伝子診断・治療やゴミ処理問題等、現在の地球環境・社会において人類が直面しているさまざまな課題を科学的視点から紹介・解説した英文テキストを用い、問題の本質を理解した上で、各テーマに対する各学生自身の考え、感情、体験、知識等を、提供された電子環境の中（次項2.3のインターネット機能に加えオンライン辞書、文法書利用を含む）で作成した英文で、主としてメーリング・リスト上に発表・交換するクラス・ワークを軸とした。さらにホーム・ワークとして、他の発言に対する感想・意見の返信、およびWebによる関連事項の調査・情報収集と英語によるその報告を、それぞれ次項のインターネットの機能を活用して行った。

その目的は、i) グローバル化と情報化が急速に進行する社会環境の中で、国際共通語としての英語で、グローバルに情報を入手し、表明し、共同作業する能力を養成すること、並びにii) 未来の社会を形成・創造する個人として、将来起こりうる共通課題に適切に対応できる態度と見識を構築する能力を養成すること、である。

2.3. 利用インターネット機能

それぞれの機能と活用方法は以下の通りである。

i) メーリング・リスト

名称クラス・エル（cls_l）のメーリング・リスト（cls_l@ml.nagasaki-u.ac.jp）を長崎大学総合情報処理センターサーバーに Majordomo、筆者により設定。その環境上で、科目担当者（筆者）とクラス全受講生間で、連絡事項を含め、メーリング・リストに適した共通の話題・テーマについての情報交換・ディスカッション。(授業時間中および授業後のクラス内での発言・会話用)

ii) E-メール

cls_l で公にされた話題を個別に発展させ、随意に個人間で自由に質問等英語で会話のやり取り。このE-メール交信には、ゲストとして授業参加してもらったネーティヴ・スピーカーの英語教師にも参加してもらった。(授業後の教室の外での個人的なお話し用)

iii) ニュース・グループ

長崎大学内に設定したローカルのニューズ・グループ、EnglishSuzu を含む)

利用回数は少なかったが、授業で取り上げた関連テーマについて、各自メーリング・リスト外の人々との英語による交信の試み。ディベートの見学、体験に相当する活動。(教室内または教室外での討論を目的とした系統立った話し合い用)

iv) WWW

授業で学習した関連テーマについて、各自インターネット上の各種サーチ・エンジンを使い適切なWeb・ページを検索、そこから得た情報・調査結果を、メーリング・リスト上のクラスメートへ英語により報告、情報交換。(教室外での個別の調査・研究と教室内でのその結果発表)

v) チャット

WWW 上で利用可能な英文によるチャット・サイト（例えば http://chat.yahoo.com 等）を各自検索、登録し、随時リアルタイムでライヴ・トーク。(ヴァーチャルな海外での個人による会話実践・他流試合用)

以上の機能を活用した種々のアクティヴィティーを、総合情報処理センター第 1・第 2 端末室での授業時間中のクラス・ワークとして、または大学内の図書館等の学習者用パソコンの端末を利用したホーム・ワークとして、適宜振り分けて課し、各自毎週 2 回の発信を目標とした。

3. 結果・考察

3.1. 英語コニュニケーション力

一連の本実践研究で、インターネット活用による英語力あるいはコミュニケーション能力の伸長については、以下の方法を用いて検討した。i) 事前・事後 Writing Task Tests ii) 学期末試験結果 iii) メーリング・リスト上の全交信記録。その結果明らかとなった事柄について、既に他の紀要等に英文で発表済み（本稿末の文献参照）であるが、本稿の意図に沿って、特にデータの一貫性と対照群設定の点から 1997 年度分の結果をもって以下に例証する。

3.1.1 挑戦」と「詳述・推敲」

年度初めの 4 月と年度末の 2 月に実施した事前・事後 Writing Task Tests の解答用紙を、各学生について事前と事後の順序を無作為に並べ、2 名のネーティヴ・スピーカー英語教師に、事前か事後かの判定を依頼した。さらに、判定の根拠を次の 5 項目（英語コミュニケーション能力構成要素）[5]の中から選んでもらった。その結果、正しく判定された学生の解答について、インターネット利用のクラスと対象クラス別に、判定の根拠とされた項目の割合で見てみると図 1 の結果が得られた。

英語コミュニケーション能力構成要素：

Sociolinguistic Competence 1: 最小限度の解答に止めず文を練って詳しく述べる能力

Sociolinguistic Competence 2: 現実的、具体的な表現力

Discourse competence: 談話構成能力

Grammatical Competence 1:　多少の間違いはあるが、より洗練された精巧な表現に挑戦する能力
Grammatical Competence 2:　間違いが少なく、正確な表現力

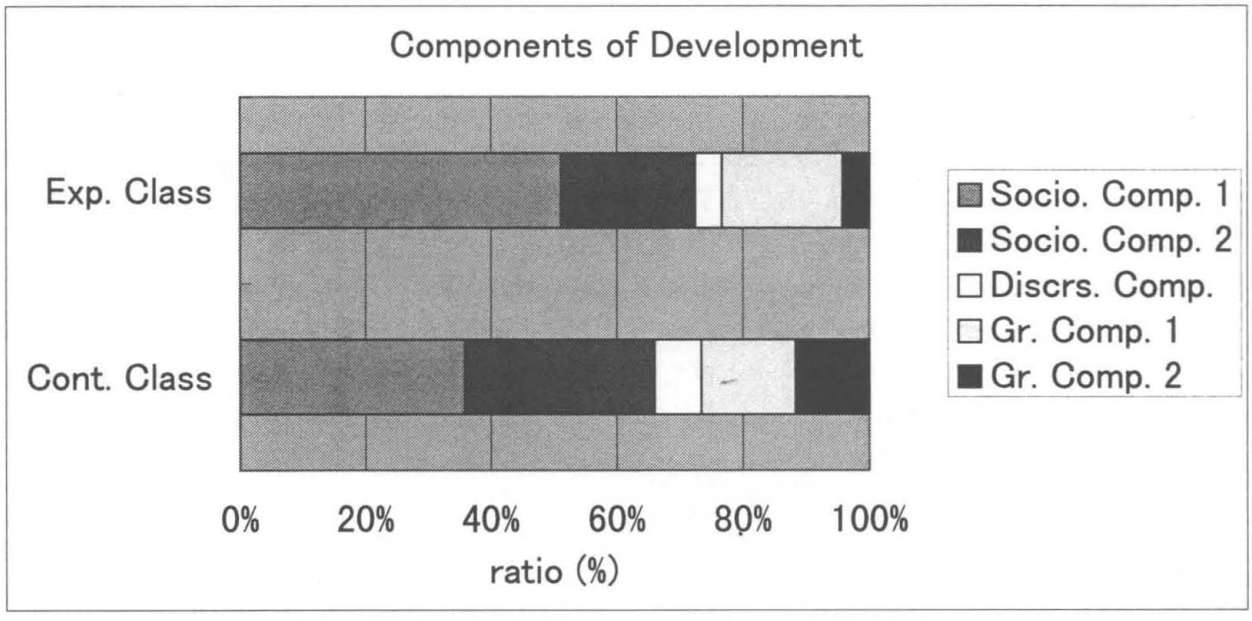

図1　構成要素別英語コミュニケーション力発達比較

要約すると、インターネットを利用したクラスの学生においては、英語コミュニケーション力の中でも特に正確さや完成度ではなく、「最小限度の解答に止めることなく、文を推敲してより詳しく述べようとする能力」と「多少の間違いはあっても、より洗練された精巧な表現に挑戦しようとする能力」の面で伸長がみられたと言える。これは、母語を含めた潜在的な一般的言語能力を外国語としての英語にも無限に発展させていく可能性を示唆するものであろう。言語を単に覚えた表現を知識として限られた範囲で再現すること、とする態度から脱却した本来の望ましい自律的言語発達への移行と見ることができる。

3.1.2　受信より「発信」

前期末に実施した試験の採点結果から、問題の種類別にインターネット利用のクラスと対照クラスの平均得点を比較し、図2の結果を得た。

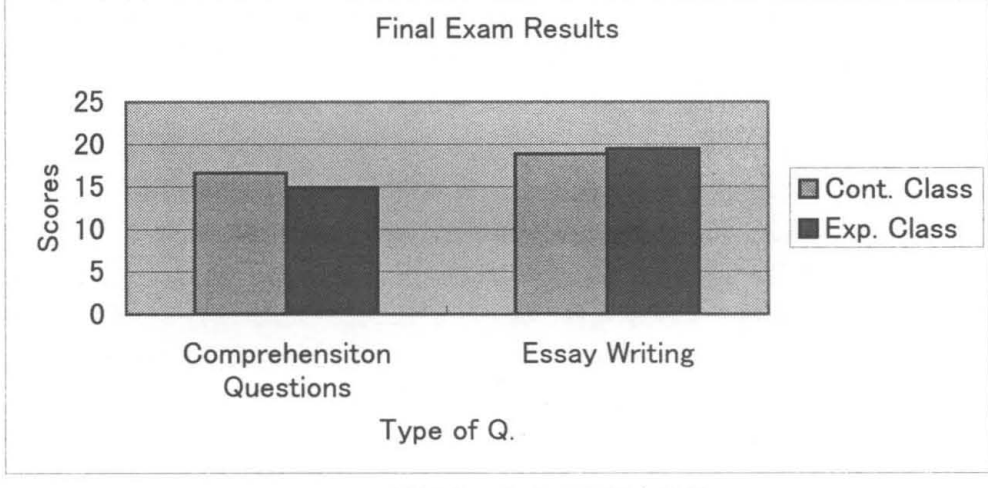

図2　読解力・作文力別得点比較

要するに、インターネットを利用したクラスの学生は、教科書（同一のものを使用）の内容理解におい

ては対照クラスに及ばない一方、任意の関連テーマに対するリアクション、意見、コメント表明の自由英作文（essay writing)においてはより優れた成果を発揮した。

3.1.3　ネーティヴスピーカーに近づく文接続構造パターン

メーリング・リスト上の全交信記録を UNIX の grep を用いて、特定の単語（接続詞等）をソートアウトし、学生の使い方（文中における位置等）を、交信相手のハワイ大学カピオラニ・コミュニティー・カレッジの 15? 20 名の学生と３名の英語教師との使い方と比較・解析した。特に接続詞"when"と"because"について文頭、文中の使い方の頻度を、５月交信開始時期から２月の終了時期までを３区間に区切り、変化の過程として比較・分析し、以下の２組の結果を得た。（図３と図４、ならびに図５と図６）

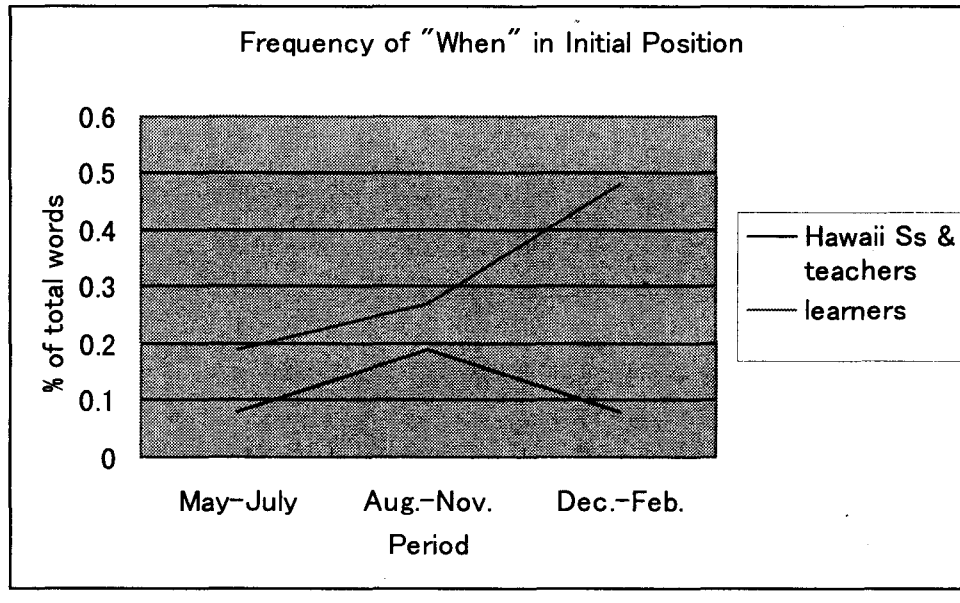

図３　文頭に接続詞"When"を使用する頻度の変化比較

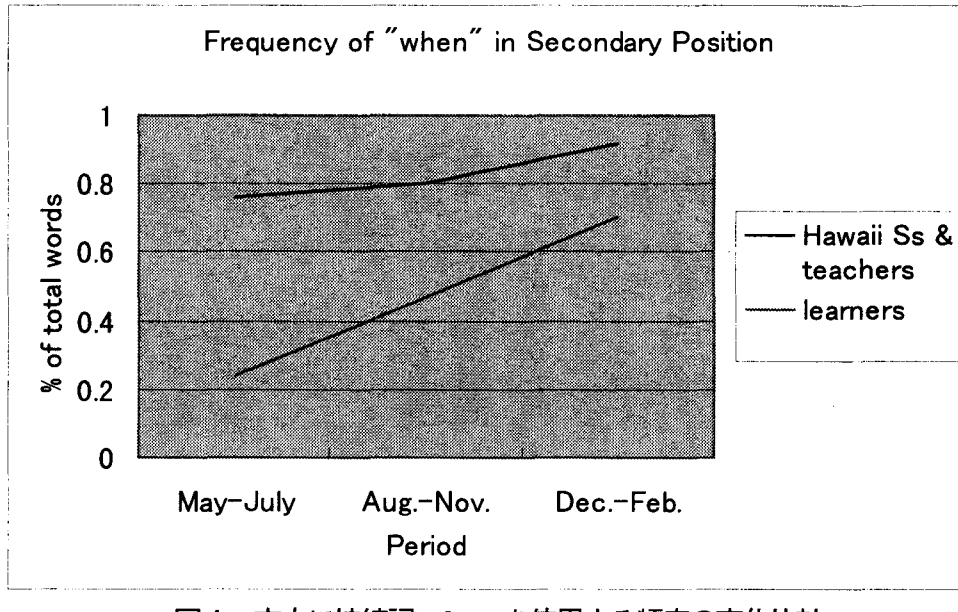

図４　文中に接続詞"when"を使用する頻度の変化比較

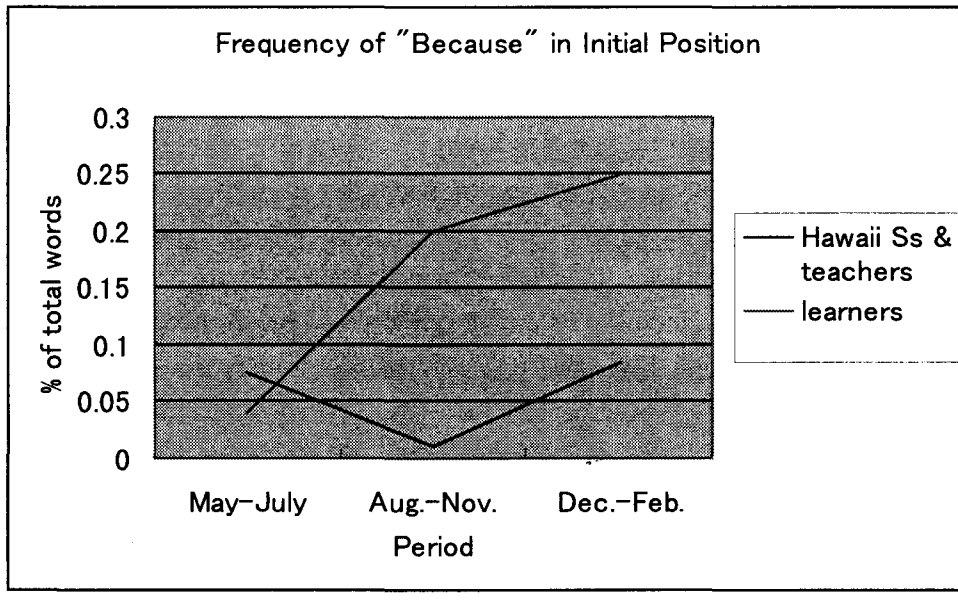

図5　文頭に接続詞"Because"を使用する頻度の変化比較

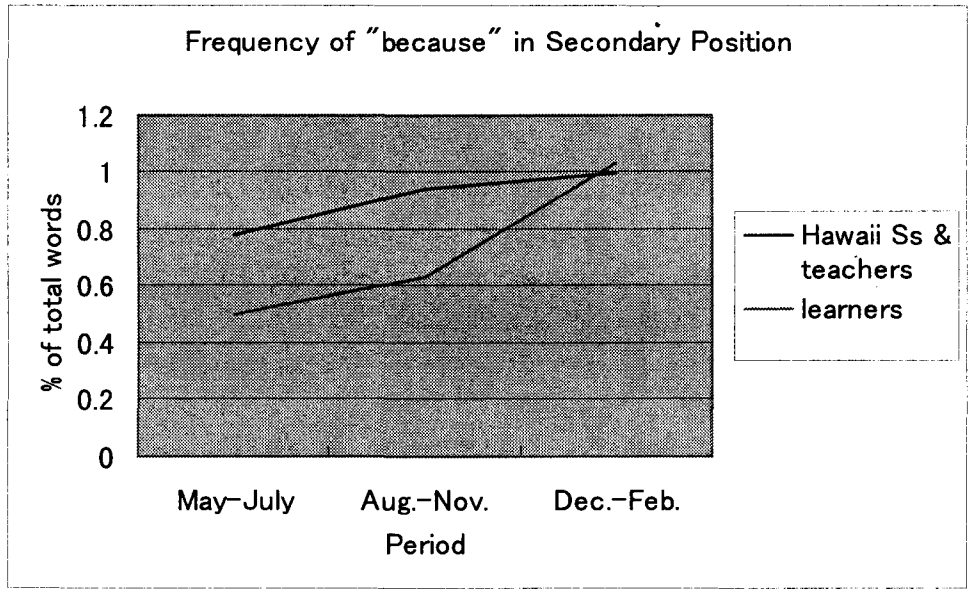

図6　文中に接続詞"because"を使用する頻度の変化比較

以上の結果より、学習者においてはインターネットを介したメーリング・リスト上でネーティヴ・スピーカーとの交信を重ねる過程で、図4および図6で察られるように、接続詞"when"と"because"を文中で使う構文の割合が無意識のうちにネーティヴ・スピーカーの割合に近づいてきたと言える。

この接続詞を文中に使う構文は、主節を前に従節を後ろに配置することであり、日本語の構文もしくは語順と相反するパターンである。従って、日本人英語学習者には、特に"Because"を文頭とした単独の節だけで文を終了する誤用も多くみられる。この問題行動は、ネーティヴ・スピーカーの英語教師によると、通常の英語授業の中で再三注意を繰り返しているが、殆ど改善が見られない現象の一つであると言う。一方、英語での主節が前で従節が後ろの（つまり"when"や"because"が文中にくる）パターンは、特に日本の英語教育の中ではあまり注目されていないようである（おそらくそこまでの時間的余裕がないためと思われる）が、ネーティヴ・スピーカーの英語使用のコーパスに基づく調査によると、明らかにこのパター

ンの割合が高いと言うことである。[6]

また、本研究の学習者について"because"の使用頻度を 3 区間ごとに合計してみると、次の図 7 に示すように、誤用も含め全体的に使用回数が時期を追うに従って増えていることが判る。このことから、インターネットでの英語による交信、ディスカッション、コミュニケーション演習の過程で、複文作成が増加したこと、さらに英語の語用論的特徴とされる理由づけ（reasoning)を多く用いるようになったと推測することが出来る。

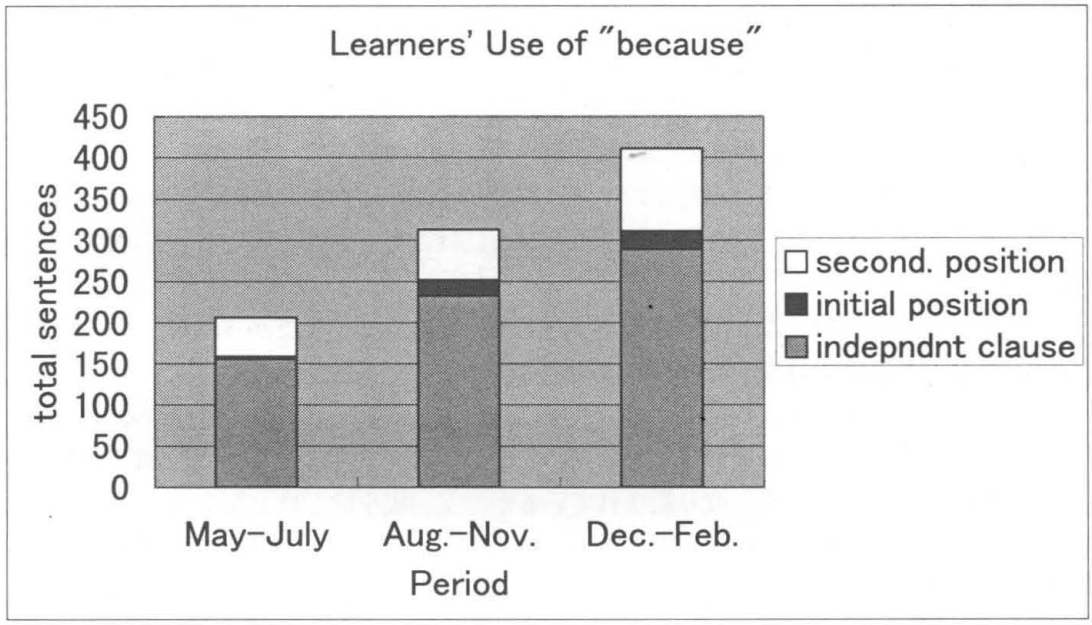

図7　学生の"because"使用の増加過程

3.2　授業評価コメント

以上の英語コミュニケーション力発達効果が観察・確認されたコンピュータネットワーク利用の授業に対して、受講学生自身はどのように評価しているのであろうか。毎学期末に提出が課題の一部として課せられているジャーナル（日誌）および期末試験時に行われる授業評価の自由記述式部分により調査検討した。その結果として、最新の 1999 年度生のコメントを、良かった点と悪かった点に大別して以下に列挙する。特に悪かった点についてはカリキュラム企画編成側にとって今後の改善点として課題となると思われる項目別に分類している。それぞれのコメントの最後の[　]内の記述は筆者による解説である。

3.2.1　良かった点

- 最近は、パソコンを使う機会が増えてきているので、今回の英語の講義でさらにパソコンを身近かなものに感じることができた。(e9e0011)
- 人のメールなど見たり、いろんな情報なども手に入ったりするので、良い。(e9e0012)
- 感想や宿題を出す時に文章を作る力がつく。[3.1 のデータで示した点を自覚できている]
  インターネットによって他の人、例えばクラスメートやホームページ等によって色々な人の考え方がわかる。(e9e0014)
- コンピュータネットワークを使うことでいろいろな情報が手に入り、ただ教科書（今回は科学的な生活上の問題について）を読むだけではわからないような遺伝子やゴミ問題についてなど具体的な例などがあり、理解を深める上ではとても良いと思った。(e9e0015)
- いままで学んできたなかでパソコンを使った英語の授業はなかったのでおもしろかった。英語の勉強だけでなくパソコンの使い方まで分かってよかった。(e9e0017)

- 自分は授業が楽しかった。(e9e0018)
- 今回１年間インターネットを使いながらの講義の中で、色々なサイトをのぞいたり、時にはNASAのホームページをのぞくなど、たいへんきちょうな体験ができてとても良かったと思う。又、クラスワークなどでクラスみんなの意見を見ることができるというのは自分とはちがったかんがえを吸収できる良いチャンスであると思う。(e9e0020)
- 今まで中学高校大学と英語の授業をうけてきたが、この授業はいままでにない授業で英語があまり好きではない僕にはただ単に教科書の訳をしていくという授業とは一味違って楽しかった。また教科書の内容も興味がある事について書いてある事が多かったのでやりやすかった。(e9e0021)
- 僕はこの授業は好きでした。なぜなら英語とパソコンの使い方が同時に学べたからです。僕は英語がとても苦手です。・・・でもこの授業はやってよかったと思います。(e9e0023)
- 英語学習とコンピュータの学習が同時にできる点。(e9e0024)
- インターネットにはさまざまな情報がたくさん飛びかっているなあと思った。インターネットをする手順が分かってよかった。また、人に手紙を送るにはどうずればよいかなどには慣れることができたと思う。(e9e0025)
- 普通に日々をくらしていくなかで、感想を英語で考えて書くことはなかったが、メールを送る時英語で書いて送らないといけないでの、いい経験になりました。(e9e0030)
- 授業にコンピュータを取り入れたことで授業中に教科書の内容をより深く理解することができたと思う。オンラインでホットな情報（たまに古いのがある）を入手することで、”今”、その問題がどのように発展して、どのように取り組まれているか、又、実生活とはどんな関係があるのか、最先端ではどういう見解をもっているか等、様々な情報があってとても９０分では把握しきれる量ではなかったが、それでもそういうものに触れることはいい刺激になったと思う。(e9e0031)
- いろいろなサイトでいろいろな英語で書いてある情報を見れてわかりやすかった。また、人の意見、感想を見れる所も良かった。(e9e0032)
- コンピュータネットワークを使う授業は大変良かったと思います。(e9e0036)
- コンピュータネットワークを使えたということで瞬時にインターネットでいろいろな事例を調べることができて大変良かった。また他の人の考えていることも良く分かり参考になった。(e9e0037)
- 毎回のクラスワークがタイピングの練習にもなった。(e9e0037)
- 海外の人の意見等も参考にできる点でネットワークを使うことはとてもいいことだと思う。(e9e0038)
- コンピュータによる授業はなかなかコンピュータを使う機会のない私にはよかった。他の人の考えなどが見ることもでき、インターネットで調べることもできた。それに返送もすぐにできたので、それもよかった。(e9e0039)
- コンピュータを使うことによって、様々な情報を得ることが出来たと思う。またそれまでインターネットのことやＥメールのことなんて知らなかった自分がこの授業で出来るようになった。(e9e0042)
- ネットワークで他の人との英語でのやり取りができ、普通ではあんまりできない事が可能になる。更に言うと、ネットワークを使えば、世界中の誰とでも英語で会話ができ、とても勉強になる事も増えると思う。(e9e0044)
- 英語の授業をパソコンで行うことで、パソコンの使い方をだいぶおぼえたので自分にはすごくプラスになったと思う。(e9e0047)
- コンピュータの使い方、メールの送り方や調べたいものがすぐわかること。(e9e0049)
- コンピュータを使うということによって、ほかの講義よりもおもしろかったと思う。e9e0050)

- コンピュータネットワークで、教科書についての意見や感想をメールで見ることができるのは大変良い点だと思った。また、パソコンの辞書で英単語を調べられるので良かった。(e9e0052)
- 普通に授業を受けるより新鮮で楽しかった。色々な情報が世界から入ってくるので本場の英語に触れることができ、これも大変貴重な体験だと思う。(e9e0053)
- パソコンを目の前にしているとねむくならないのがいい。(e9e0058)
- コンピュータの事が少しでも[この学生は半期のみ履修]扱いやすくなったし、他の人の意見を見れたのは良かった。(e9e0059)
- コンピュータをひんぱんに使ったことがなかった自分には、インターネットなどをするきっかけになり、とても面白かった。(e9e0062)
- P.C.を使ってする英語の授業は初めてだったので、とても新鮮でした。PC を使うといつでも先生にメールが送れるし便利だと思います。[教育学部4年生] (e9e0066)
- このような授業は英語では初めてだったので、とてもおもしろかったです。学生の自主性を尊重する授業だったと思います。教科書の内容だけにとどまらずコンピュータを使えば、さらに広い内容も知れてとてもよいと思います。[教育学部4年生、授業の趣旨をよく理解している] (e9e0067)
- いろいろな事がインターネットで検索できるのでとても良い方法だと思います。(e9e0068)

以上は、全般的に授業の趣旨をある程度理解し一応高い評価をしているコメントである。しかし内容的には、インターネットによる情報収集面に強い関心が示されているものが多く、利用態度は受け身的な段階に止まっていたと想像される。今後、より能動的な使い方を養成していく必要があろう。

3.2.2 悪かった点

3.2.2.1 時間割上、自習時間が十分にない

- メーリングリストでクラスから上がったメールを見たり返信したりするには大学のメインコンピュータに接続されたシステムでしか行えないので、情報処理センターや図書館にわざわざ行かなければならないので、どうもなまけがちになってしまった。家のパソコンでメーリングリストを見ることができればどれほどいいかと何度思ったことか、、、、(e9e0031)
- しかし宿題を提出するのに e メールを使うので、コンピューターがある図書館などに行かなければならなかった。図書館など使用時間がきめられているので送れないことがある。(e9e0050)

3.2.2.2 利用可能な PC が十分にない

- 家にパソコンを持っていないので少し不便なところもあった。(e9e0053)
- コンピュータをもっていないと、あまり興味がわかないというのと、使い方がよくわからないということがあります。(e9e0016)
- (e9e0031) [3.2.2.1 参照]
- (e9e0050) [3.2.2.1 参照]

3.2.2.3 自発的学習が困難である

- インターネットとかして授業を聞かない生徒もふえるかもしれない。(e9e0012)
- オンラインで授業するのだから窓の開いた自由に出入りできる教室で授業するのと同じようなことなので授業の間をぬって部屋から出ていく人がいた。そのため1つの課題に対して内容の薄いリアクションが数多く見られた。ある程度学生の自主性が必要であると思った。(e9e0031)
- 他のページを開いてしまうことがあった。(e9e0011)
- 授業中つい他のゲームやインターネットをしている人もいたので、あまり集中できないというのが悪いと思いました。(e9e0059) [教師側で介入のデバイスを上手に使うべきであった。]

- パソコン室でやるので、授業は先生と一部の学生だけでやっているように思えます。パソコンゲームをしたりして授業を聞いていない人がいたと思います。(e9e0030)
- しかし、授業以外の内容のこともインターネットで見ることができるのでつい、それをしてしまう（遊んでしまう）ということがあり、これに関しては自覚を持つ必要もあるのだが、自分は自覚を持てない部分があったようだった。(e9e0039)
- 授業とは関係ないものをインターネットでみたりすることができること。(e9e0049)
- 授業中にネットワークやゲームで遊んでいた人が多かったこと。(e9e0032)
  [学生が授業中他の所謂内職やほかの事を考えている現象は、例えば対照群のクラス等この授業に限らず観られることである。手（頭）を休ませない演習の題材の持ち込みも検討されるべきことであろう。一方、手や頭を休みなく使うことだけが学習であるとは限らないことを教師と学生が認識することも重要である。その上で授業時間の有効な使い方を工夫する必要がある。]

3.2.2.4 情報リテラシーが不十分である

- (e9e0016) [3.2.2.2 参照]
- けれど自分の場合、特に後期は始めの３、４回送り先をあやまったせいか届かなく、やる気がなくなってしまった。(e9e0036)
- でも最初のうちは、キーボードを素早く打つことが出来ないため、自分が書こうとしていることをなかなか表わすことが出来なかった。(e9e0038)
- コンピュータネットワークを使った授業は、パソコンを使いこなせない僕にはとてもたいくつでした。毎週メールを送るなんて考えられません。僕にはもっとふつうの授業がよかったです。唯一よかった点は教室があたたかかったことです。[後期のみ履修学生] (e9e0065)
- ただ、私はコンピュータが苦手なので当初はコンピュータを使いこなせなくて苦労した。(e9e0037)
- ただ、悪い点を挙げるとするならばメールアドレスをまちがえた場合に先生にメールがとどかないことだと思う。(e9e0042)

3.2.2.5 その他・授業形態方法に改善の余地がある

- メールを使うのが主だったので、もっといろいろ使えるような気がする。(e9e0055)
  [授業で紹介した他大学の英語学習用インターラクティヴ・ウエヴ等４）のことを示唆していると思われる。]
- パソコンの中に翻訳ソフトが入っていれば完ペキだった。(e9e0058)
- パソコンの中の辞書はボキャブラリーがすくない気がした。(e9e0058)
- 教師との関係が希薄になるので、質問などをする機会があまりなかったのは、少し残念だった。(e9e0047)
- 授業でパソコンを使っているのはメールを書くときなど、少しの時間でパソコンをあまり効率良く使っていないのではと思った。(e9e0052)
- しかし英語の講義という点で考えるとインターネットを読むなどという目だけの作業とキーボードを通して英文を書くなどで、えんぴつを持って英文を書くという作業がない分だけ効率はわるいのではないかと思う。インターネットの講義とそれとは別にペーパーの宿題を出してもらえると良いのではないかと思う。(e9e0020) [英文を書くと言うことを鉛筆で書いてきた習慣に縛られて認識している。]
- 今回の講義で使用した教室が広すぎる事。各人が思い思いのことをしていて、いま一つ、講義の内容がつたわっていなかたように思う。(e9e0024)
- 教師とじかに対面することは少ないので[机の配列が演習用]、コミュニケーションの面で希薄のように思った[半期のみ履修の学生]。(e9e0062)

- しかし、授業では教科書を用いているので、直接は PC が授業には関わっておらず、ついつい遊びに使ってしまうこともありました。せっかく PC が使えるのならインターネットを使った教科書の内容に関する記事を紹介したり、生の英語に触れたりできると、もっと PC を利用した授業になるのかもしれないと思いました。[教育学部4年生] (e9e0066)
- 自分は絶対にしなかったが、他人のメールを見てそれをまねてメールを送る人がいるかもしれない。(e9e0014)
- インターネットで感想を送ればいいみたいな感じになっていて、ちゃんとした授業という感じではなかったと思う。(僕らにとっては良い事なんですけれども)挙げるとすればこういう事になります。(e9e0044)
- 授業はパソコンが中心だったが、そのためか分からないが、chapter の内容をよくつかむことができなかった。もっと教科書をじっくり見てみてもいいんじゃないかと思う。でも、普通うけている授業とは違う感じがしたし、それなりによい勉強ができと思う。(e9e0025)
- ただ、先生と生徒が顔と顔を合わせて意見を交換するという点においては、少し物足りない点があると感じた。人と人とが言葉を交すことで生まれた言葉を学習するということはやはり話しをするということも大事ではないでしょうか？(e9e0015)

以上を概観すると、担当教員による授業形態や方法にまだまだ工夫が必要であることが判る、と同時に学習環境上の課題として、自習・演習時間の確保ならびに利用可能な PC 端末の確保が望まれる。また、全体的なカリキュラムの課題として、基礎的な情報リテラシーおよび情報コミュニケーション力の不足をどこでどのように補い教育するかを検討する必要があろう。このようなカリキュラムを含めた学習環境のハード面が整備されてはじめて、自発的学習が可能となり、コンピュータネットワークの本領の一つである自律・自立的学習が促進されると言えよう。

また、学生の評価コメントを観察すると、「英文を作る」と言うこと、ならびに「コミュニケーション」は何かと言うことについて、従来取られてきた方法によって定義・認識している傾向がみられる。この点については、言語教育者の中にも誤解が在るということが最近指摘され、face-face-communication とは何かについて議論を呼んでいる。[7]

4　結論・提言

4.1　英語コミュニケーション力強化の観点から

以上の考察より、インターネット環境における語学教育効果として、次の点を結論づけることが出来る。

（1）相方向通話の増進
（2）自律・自立的学習の促進
（3）言語使用における試行錯誤または挑戦と推敲の機会の提供
（4）文構造に対する認知的理解の強化

4.2　環境整備の観点から

本コンピュータネットワーク活用の英語コミュニケーション教育実践を、より効果的に実施するために、電子環境構築に関して次の点を指摘することが出来る。

（1）オンライン辞書、参考書（それらとのリンクを含め）の充実とアクセスの容易化
（2）パーソナルデータベース作成の簡便化とその指導の導入（作成した英文の消去を防ぎ、後に自身の発展的学習の材料として役立て、より自立的学習をサポートするため）
（3）多くの学生が自由に利用できる PC の増設

このことは、可能であれば多い方がよいが、学生の授業カリキュラムが過密であること、設置スペース、最近のＰＣの高機能・低価格化、インターネットの家庭への普及等を考慮すると、学生個人個人が自宅に文房具の一つとして、インターネット接続できるＰＣを持つことを必須とすることの方が、よりよい解決策であろう。

4.3 カリキュラム改革の観点から

今後ますます進む情報化社会の中で、学生にはパソコンやインターネットを十分に活用する能力が求められている。それに対して所謂「情報活用能力」を育成するための演習が十分に行われているとは言えない。また、現在、大学で行われている一般情報処理科目の情報処理演習は、小中学校や高等学校で行われている情報関連科目の演習内容と変わりがないものも多いと観られる。大学における情報処理演習ではもう少し、情報処理技術の基本原理と応用に関わる演習を、これからのグローバルに国際化された社会で実際に使える情報コミュニケーション能力育成として、きちんと行うべきである。特に電子メールならびにメーリングリストや電子ニュースの演習は不可欠であるが、その内容は単なる道具の利用説明会のようなものではなく、中味が意思疎通や意見交換、ディスカッションといった真のコミュニケーション教育として行われるべきである。これを語学教育の側から考えると、Web、メール、ニュース等を使ったコミュニケーションプラクティスを積極的に取り入れた授業ということになろう。従って、英語によるコミュニケーションプラクティスを通して、コンピュータとネットワークの活用が図れるように、全学教育カリキュラムの中に情報リテラシー教育と英語教育とを融合させた科目の設定を検討すべきではないかと思う。

5 おわりに

最後に、3.2.2 の末尾で記した点に繋いで、コンピュータネットワークによるコミュニケーション教育に対する批判に対して、朝尾幸次郎氏が英語教育のメーリングリスト上で次のように反論している発言を引用して結びとしたい。

> 「・・・ 同じように本物の face-to-face コミュニケーションはどこにあるのかと考えてみますと、これは単に距離的、物理的に顔を合わせているということではないということがわかります。・・・つまり、単にたがいに目と目を合わせることのできる距離にいるということがそのまま、 face-to-face コミュニケーションを保証することにはならないのです。ネットワークは face-to-face コミュニケーションがないというのは矮小化した見方でありましょう。」[8)]

謝辞

本実践研究の遂行にあたりご協力いただいた長崎大学総合情報処理センターのスタッフの方々、ならびに熱心に授業に参加してくれた学生の皆さんに謝意を表します。

注

1) 「日本人『バイリンガル改造論』急浮上―ホントにやるの？英語の公用語化」『朝日新聞』（平成12年2月25日）西部本社版7ページ
2) 「インターネットによる国際コミュニケーションおよび異文化理解教育に関する共同研究」（課題番号 07044044)
3) 野崎剛一、鈴木千鶴子 （1998）「インターネット利用による全学教育 『総合英語』実践研究報告」長崎大学総合情報処理センター『センターレポート第17号』

4） 例えばJunshin On-line Academia (http://www.n-junshin.ac.jp/BACS/)

5） Canale, M & M. Swainの説を土台として、筆者とネーティヴ・スピーカーの判定者とで協議し分類したもの。

6） シンポジウム「電子環境と語学教育」（「電子環境と語学教育」研究会主催、於：福岡大学セミナーハウス、2000年1月15日）での佐良木昌氏の発言。

7）、8）朝尾幸次郎「Re: 小学校の現状はこんなもの」等、英語教育者間のメーリングリスト：eflj (English as a Foreign Language in Japan)に2000年2月20日より掲載の一連の投稿記事（eflj@clc.hyper.chubu.ac.jp)

参考文献

[1] 野崎剛一（1995）「ネットワークの運用・管理について」長崎大学総合情報処理センター『センターレポート』第14号 pp.117－121

[2] 野崎剛一（1996）『コンピュータとネットワーク（インターネット活用)』

[3] Suzuki, C., M.Oji, J. Keaten-Reed, J. Baldridge, K. Nozaki, F. Noji, Y. Ishigami, J. cook, & S. Singer (1996). "Cross-cultural communication and Understanding through Internet," Programme Abstracts of 11th World congress of Applied Linguistics. p. 197.

[4] Suzuki, C., J. Keaten-Reed & K. Nozaki (1997). Increasing opportunities for interaction and facilitating learner autonomy by the use of the Internet. The JACET Kyushu-Okinawa Chapter Annual Review of English Learning & Teaching 2: 37-51

[5] 野崎剛一、鈴木千鶴子 (1998)「インターネット利用による全学教育 『総合英語』実践研究報告」長崎大学総合情報処理センター『センターレポート』第17号 pp. 31-45

[6] Suzuki, C., J. Keaten-Reed, M. Oji, J. Baldridge, & K. Nozaki (1998). Internet use and the development of communicative competence in Japanese EFL learners. Junshin Jyoshi Tanki Daigaku Kiyo (Journal of Junshin Women's Junior College) 35: 117-124

[7] Suzuki, C., J. Keaten-Reed, & K. Nozaki (1999a). Networked vs. non-networked EFL classes of university in Japan. Junshin Jyoshi Tanki Daigaku Kiyo (Journal of Junshin Women's Junior College) 36: 89-98.

[8] Suzuki, C., J. Keaten-Reed, & K. Nozaki (1999b). Developmental process of interactional strategies and discourse production through the Internet communication practice. The JACET Kyushu-Okinawa Chapter Annual Review of English Learning & Teaching 4: 39-50.